



テトラクリスタルアイランド

時はマスターと分かれたその後。

新たな存在として生まれ変わった自分。 名は『プロミス・ザ・ヒート』

この身にサラマンダーの能力を授かった、1つの存在。

そして、自分が犯した残酷な仕打ちの罪を背負った、闇の存在でもあった。

自分を生み出してくれた本当のマスターは自分達の元から離れ、現実世界へと帰って行った。

この世界に残された自分を含めたオリジナルキャラクター達は皆、それぞれの行動を取っていた

。

ある人は島を離れ、ある人は島の管理へと戻って行った。

自分も行動をすべく、ある方と共に行動をする事に決めた。

「・・・と言うわけなんだけど、何とかかなりそうでしょうか。」

プロミスの前で行われている交渉。

1人の少女と1匹の龍とのやり取りだ。

彼女はチェリー、彼はグロウ。

この後住む場所を探すべく、交渉しているようだった。

チェリーの後ろでは、他の存在達が交渉の成り行きを見守っていた。

「この島の近くでよければ、土台は僕が何とかしようか？」

「ええ、よろしくお願いします。」

そして2人の交渉は終わり、承諾したようだった。

「じゃあとりあえず土台を用意してくるから、少し待ってて。」

グロウはチェリー達にそう告げると、翼を広げ空へと飛んで行った。

「皆さん。 グロウさんがお帰りになるまで、少し待ってましょ。」

チェリーは後ろにいた存在達にそう告げると、近くの木陰へと移動した。

他の存在達は主人からの申し出を聞き、同じく木陰へと移動した。

プロミスも同様に木陰へと移動した。

だがプロミス少々距離を置いているようで、チェリー達のいる場所から少し離れた所に座った。

プロミス達が木陰でグロウの帰りを待っていると、島に爽やかな風が吹いてきた。

風は数枚の葉を乗せて、プロミス達の元へ。

プロミスが手を出すと、一枚の葉が手元に来た。

まだ緑色の、綺麗な葉だった。

「ここは、とても平和な場所だな・・・」

プロミスは手に葉を持ちつつ、そう呟いた。

今までのマスター達の世界を見てきたからこそ、ブラベリーよりプロミスの方が、この世界への適応力は早いのもかもしれない。

暗黒の闇の時間が広がる、存在達との争いが耐えない混沌とした世界。

緑が生い茂り、自然の驚異が絶え間なく来る世界。

熱い大地と共に戦いの火が広がり、自然が無い世界。

永遠と同じ時間、時期を繰り返し、とある時間を拒絶している悲しい世界。

そのほかにもさまざまな世界があった。

だが今自分がいる世界は、自然があり、時間があり、存在達が平和に住む世界。

『今のマスターは、自然があり、平和な世界が好みなんだな。』

プロミスは島に吹く風にそよがれ、そんなことを考えていた。

自分と同じく木陰で休むチェリー達も、戦いはあるようだが、平和を好んでいるようだった。

今のチェリー達はにこやかな表情で会話をしていた。

今は住む所が無いものの、兆しは見つかっている様子なのか、暗い表情ではなかった。

そんな平和な過ごし方をしている今のプロミスにとって、この世界は初めてでもあった。

存在が作り出され住む世界では、その世界の仕組みに従い、行動しなければならない。

戦わなければならない世界では、戦うことを望んでいなくても、戦わなければならない。マスターの望んでいる行動をしなければならない世界では、自制を解き、その行動をしなければならない。

永遠と同じ時間を繰り返している世界では、同じ過ごし方をいつもしなければならない。存在達の運命は、全て創造主であるマスターが所有している。それが普通だ。

プロミスが入るこの世界は、存在達がある程度平和に過ごし、いつも似たような行動を取っている。

だが毎日が同じではなく、所々違う場所が存在していた。

いつも決まった行動をしていたとしても、毎日同じ時間同じ時期にその行動をしている訳では無い。

時間が多少ずれ、何か違う場所が存在していた。

『この世界での生活にも、早くなれないと。』

プロミスは持っていた葉を手から離し、風に乗せて飛ばした。

手放された葉は風に乗れ、自由に飛び回って何処かへ吹かれてしまった。

少しこの世界での暮らしを知ってから、行動したほうがいいのだと、プロミスは悟ったようだ。

『平和な時間はいつも平等に来るのかは分からないが、それなりの行動が出来れば、この世界での生活にも慣れるよな。』

プロミスはそう考え、チェリー達の元へと帰ってきたグロウを見ていた。

「プロミスさん、行きましょうー」

グロウの背中へよじ登り、プロミスを呼んでいるチェリーは笑顔でこちらに手を振っていた。

「今行きます。」

プロミスは軽く返事をし、その場に立ち上がった。

『それに、この世界で最後かもしれないしな。 マスターの記憶の世界を、当ても無くさ迷っていた時は。』

プロミスはそう思い、チェリー達と同様にグロウの背中へ登った。

グロウは飛べないチェリー、プレスル、ティザー、プロミスを背中に乗せ終わると、翼を羽ばたかせ、空へと飛び立った。

同様にホネスティも羽を羽ばたかせ、グロウ達の後へ続いた。

ホープは持っていたラッパに座り、グロウ達の後を飛んで行った。

グロウはそんなチェリー達を誘導し、テトラクリスタルアイランドの近くに召還した、新たな大地へと向かって飛んで行った。

見守る行動

NEWビーイングキャッスル予定地

グロウに導かれ、チェリー達はテトラクリスタルアイランドから少し離れた場所にある、新ビーイングキャッスル予定地へと到着した。

その場所には特に生物達は折らず、荒れた大地が広がっていた。

グロウは島へと降り立つと、背中に乗っていたプロミス達を下ろした。

「結構広い土地なんですね。」

チェリーは島へと降り立つと、広がっている荒地を見つつそう言った。

「僕には大地の力はあるけど、他の力はないんだ。 自然の力を使うのは、ストレンジャー達だから。」

グロウはチェリーの言った事にそう言った。

「でも、コレだけ広いと、以前よりいい城が作れるかもしれないな。」

「確かに、やるだけの価値はあるわ。」

少し遅れて島へと到着したホープとホネスティは、口々にそう言った。

「そうね。 では皆さん、頑張りましょう！」

「了解！！」

チェリーからの一声に、島にいた存在達は一斉に言った。

「まずは土地を綺麗にしちゃいましょ。」

「そうなると、俺達の」

「出番ね。」

チェリーがそう言うと、プレスルとティザーは手に使用人の道具を召還し、島を綺麗にし始めた

。

「僕は事前に用意しておいた、木材とかを取ってくるね。」

グロウはそう言うと、島を飛び立ち、何処か別の島へと向かって行った。

「俺達は建築に必要な道具を調達してくるよ。」

「そうね。」

ホープはそう言うと、ホネスティと共に建築に必要とされる道具の調達へと向かって行った。

島にいた存在達はそれぞれがする仕事をするため、行動をし始めた。

チェリーはと言うと、いつの間にか持ってきていた模造紙とペンを取り出し、城の設計図を描いていた。

プロミスは特にすることが無かったため、チェリーの近くへと移動し、描いている設計図を見ていた。

「・・・えっと、ここが部屋で、ここがキッチンっと。」

チェリーはある程度覚えている範囲で、以前の城と似ている構造を描いているようだった。

プロミスはそんなチェリーを見つつ、設計図を見ていた。

「プロミスさんは、何か欲しい物とかってありますか？」

そんなプロミスを見て、不意にチェリーは問いかけた。

「特に無いかな。　しいて言えば、部屋・・・かな。」

「プロミスさんの部屋ね。　OK。」

チェリーはそう言うと、城の1箇所部屋を作ることを紙に書き込んだ。

「チェリー。　俺は貴方に出来る事ってないかな。」

「私に？」

プロミスはふと口を開き、チェリーに問いかけた。

「今は城を作る以外には、特に無いかな。　とりあえず最優先にすることだから。」

チェリーはプロミスからの問いかけに答えた。

「でもなんで、貴方はあの城で使用人達と共に、住んでいたんですか？」
「あの城はね、お父様が残してくれた、たった一つの財産だったの。」

チェリーは紙に設計図を書くのを止め、顔を上げ言った。

「私のお父様は、とてもお偉い方で、私はとても信頼していたわ。」

チェリーは明るい笑顔で話しを続けていた。

「でもある時、お父様は姿を消した。 置手紙を1つ残して。」
「置手紙？」

プロミスはチェリーからの話を聞き、気になる点を聞いた。

「手紙には『私の事を守るために姿を消す。 城を頼む』って。 理由がよくわからなかったけど、私はお父様の言いつけに従ったわ。」
「貴方を、守る。」

チェリーは少し表情を暗くしつつ、話を続けた。

「プレスルやティザーは、私が生まれた時からあの城と一緒に住んでて、私の身の回りの世話をしてくれたわ。 お父様が消失することは、聞いていたみたい。」
「それで、いなくなってからはずっと1人。」

プロミスはそう言うと、チェリーは頷いた。

「確かに、皆と過ごすのは楽しかったわ。 でも立場が違うから、あまり楽しくは無かったの。」
「同等の立場、友達が欲しかった？」

「そうね。 そしてある時、ホープとホネスティにあったの。 私は、あの2人が一緒に城に住んでくれてとても嬉しかったわ。 寂しかった毎日が、楽しくなったから。」

チェリーは再び顔を明るくし、プロミスに言った。

「2人は少しだけ私に気を使ってたけど、とても優しかった。 いつも私に笑顔を提供してくれたわ。」

チェリーは視線をずらし、別の方向を見た。

そこにはプレスルとティザーが一生懸命に土地を直す姿があった。

スコップを片手に、ティザーは荒れた大地を掘っていく。

その後をプレスルが、何処から持ってきたのかローラーを引き、綺麗な平地へと戻していく。

少し大変そうだったが、2人は楽しそうだった。

「皆私に大して優しく、尽くしてくれた。 私はそんな皆さんの笑顔を持って、お父様から管理を任された城を守るわ。 それがすることだから。」

「そうなのか。」

プロミスはチェリーから城の話をおお体聞き、その場に立ち上がった。

「じゃあ俺も、出来る事をしないとな。」

プロミスはそう言うと、胸の前で手を構え、先ほどまでの姿を変えた。

先ほどまでのスタイルとは違い、少し丈夫そうな布を見つけたスタイルになっていた。

「俺はマスターから貰ったこの体で、何かをしたい。 まずは貴方に対して、使わせてもらう。」

プロミスはそう言うと、手に炎を召還した。

炎は形を変え、面の広いハンマーのような形になった。

プロミスはそのハンマーを片手に、プレスル達の元へと向かって行った。

綺麗にした砂地の上を、プロミスはハンマーで叩き、地盤がしっかりとした大地へと作り変えていった。

炎の力が含まれているハンマーのため、大地は熱と圧縮を受け、硬くなっていった。

プレスルとティザーはプロミスの行動を少し見た後、再び行動を開始した。

チェリーはそんな3人を様子を遠くから見守りつつ、設計図を描いて行った。

NEWビーイングキャッスル予定地

城の予定地である荒地の広がった島を整え終わると、丁度のタイミングでグロウ、ホープ、ホネスティがそれぞれ道具を持って島へと帰ってきた。

時刻は昼過ぎ、まだまだ作業が続けられる頃合だった。

グロウは抱えられるだけの大量の建築材料を持っており、島へと着地すると、持っていた土や木材を島に置いた。

ホープとホネスティも同様に、別の島から調達してきた建築道具を島に置いた。

「お疲れ様皆。」

チェリーは帰って来た3人と作業をしていた3人に一言言った。

「とりあえず木材はコレで何とかかなと思うけど、また足りなかったら調達してくるね。」

「ありがとう、グロウさん。」

チェリーはグロウにそう言うと、持っていた予定構造の書かれた紙を広げ、城の大体の場所を決めた。

「えっと、とりあえず皆さんは材料を運んでもらってもいいかしら。」

「了解しました。 チェリー様。」

プレスルがチェリーからの申し出を受け、皆は材料を片手に島の中心へと運んでいった。

「えっとグロウさん。 島のデザインはこんな感じがいいんだけど。」

チェリーは皆が材料を運んでいる間、グロウと設計した城の見取り図を見て話をし始めた。

「そうなるよ、まだまだ材料が足りないね。 とりあえず1日1日で出来る範囲の材料を調達して、少しずつ作っていかうか。」

「そうね。 お願いしますわ。」

チェリーはグロウとの話を終え、紙を丸め、皆と同様に材料を運び始めた。

グロウも同様に材料を運び始めた。

「えっと、そこは土で固めてもらってもいいかしら？」

「了解！」

チェリーは設計図を見つつ、城の一箇所の部分を指差し、プロミスに言った。

プロミスはそう言うと、手から炎を召還し、指定された部分に土をかけ炎で焼き固めてしまった。

「コレでいいか？」

「ええ、バッチリよ。」

チェリーは固められた部分を見つつ、プロミスにOKを出した。

「次はそこね。 グロウさん、抑えておいてー」

「わかったー」

次に指定された場所をグロウは支え、プロミスは同様に木材に土をかけ熱で固めた。そうした作業を繰り返し、城の外壁部分を作って行った。

そして段々と日がくれ、夜。

「皆さん、お疲れ様！」

グロウが持ってきた材料が全て無くなり、チェリーは作業をしていたプロミス達に声をかけた。外は暗闇にもかかわらず、島は明るかった。その正体は、グロウが召還したホタルだった。

「今日はこのくらいにして、また明日頑張りましょ。」

「そうだな。」

「お疲れ様ー」

チェリー達はそう言うと、建設途中の城へと向かって行った。

今日の段階で出来た城は、約1階部分の外壁のみ。

チェリー達は出来立ての外壁の中にテントを立て、しばらくそこで寝泊りすることになったのだ

。

女子と男子がいるため、テントは2つある。

「初めてだな。 テントなんて。」

「そうだな。」

こちらは男子の集まるテント。

ホープとプレスル、それにプロミスがテントの中にいた。

グロウはテントには入れ無いため、外にいた。

「でもいいのかな。 使用人の俺達が主人と一緒にいるなんて。」

プレスルは着ていた鎧を脱ぎ、寝袋に入りつつそう呟いた。

「そんな事いいじゃねえか。 今じゃあアリス様以外、俺達は皆平等の立場にいるんだからな。」

「そうだよ。 それに皆友達なんだから、上下関係なんて気にしなくてもいいよ。」

ホープとグロウは口々にプレスルに言った。

「そうだな。 ゴメン。」

皆からの励ましに、プレスルは言った。

「俺も、その中に入ってていいのかな。」

ふと、プロミスは寝袋に入り、枕を抱えつつそう呟いた。

プレスルよりもこちらの方が少々悩みが大きい様子だった。

「もちろんだぜ。 まだ昔の事を悩んでたのか？」

「俺がしたことには変わらないからな。 罪は大きい。」

「ま、とりあえず仲良くしようぜ。 作られた存在同士な。」

そんなプロミスを見てか、プレスルはプロミスの近くへ行き、プロミスの肩に手をかけた。

「そうだな。俺達皆、作られた存在同士だしな。」

ホープも同様にプレスルと同じくプロミスの肩に手をかけた。

「皆仲良くしようね。」

「そうだな。ありがとう。」

プロミスも同様に励まされ、笑顔で言った。

そんな様子を見てか、そのテント周辺にいたホープ達は笑顔で笑った。

「随分とにぎやかなね、あっちのテント。」

そんな男子達の集まったテントの騒ぎを聞きつつ、ホネスティはそう呟いた。

「またプレスルが何か言い出したのかしら。愉快の意味を込められた存在は本当ににぎやかなね。」

そんなにぎやかな笑い声を聞きつつ、ティザーはそう言った。

「確かに隊長にしては、皆さんを明るくしている行動のほうが多く目立ちましたもんね。」

「それがプレスルのいい所よ。だれでも普通に励まされてしまうんですからね。」

チェリーからの意見に、ティザーは同意した。

「笑顔はやっぱいいわね。」

「そうね。」

3人は話がまとまり、苦笑していた。

「そろそろ私達も寝ましょうか。」

「そうね。」

チェリーがそう言うと、2人は同意し、テントの明かりが消された。

「おやすみなさい。」

チェリー達はそれぞれの寝袋の中へと入り、目を閉じた。

「そろそろ俺達も寝ようか。」

「そうだな。 明日の作業も残ってるからな。」

女子のテントが消灯され、こちらのテントも消灯となった。

「おやすみ、皆。」

「おやすみなさい。」

ホープ達も同様に寝袋の中に入り、目を閉じた。

しばらく夜の楽しい一時を過ごし、プロミス達は夢の世界へと旅立って行った。

四神達の手助け

NEWビーイングキャッスル予定地

プロミス達が夢の世界に旅立ってから数時間後。
ビーイングキャッスル予定地であるこの島にも、朝日が昇ってきた。

「うーん。」

テントの外で眠っていたこともあり、朝日を一番早く浴びたグロウが目を覚まし、ゆっくりと体を起こした。

「もう朝・・・ ふあああ～～。」

グロウは体を起こし立ち上がると、大きなあくびを1回した。

「また材料取ってこないと。」

グロウは少しその場から移動し、翼を動かした時の反動の風がテントに当たらない位置へと移動した。
そして大きな翼を広げ、城の建設に必要な材料を取りに出かけて行った。

グロウが飛び立ってから数分後・・・

「うーん。」

次に目を覚ましたのは、プレスルとティザー。
職務の関係上、早起きが癖となっている2人は目を覚まし、それぞれが衣服を着てテントの外へ。

「ようティザー。 おはよう。」

「おはようプレスル。」

2人はほぼ同時に外へ出ると、挨拶をした。

「さて、今日も一日職務を頑張りましょうか。」

「そうだな。今の俺達のする事は、これくらいだからな。」

2人はそう言うと、それぞれのテントで眠っている主人とプロミスを起こしに行った。プレスルとティザーからのモーニングコールを受け、プロミス達は目を覚まし、外へ。

「ううーん。今日もいい天気だな。」

「そうね。朝日が気持ちいいわ。」

「今日も一日、頑張らないと。」

ホープ達は身支度を済まし、テントの外へ出た。

「あ、皆、おはようー」

ホープ達が外へ出たのとほぼ同時に、先に目を覚まし出かけていたグロウが大量の材料を片手に戻ってきた。

「おはよう、グロウさん。」

チェリーはグロウの姿を見つけると、挨拶をした。

「おはよう、皆。」

「今日も一日、頑張りましょう。」

「うん。」

グロウは持っていた材料を置き、皆に挨拶をした。

「こんな所にこんな島があったのか。」

ふとグロウ達が朝の挨拶をしていると、グロウ達のいる場所とは別の方向から声がした。

「？ あ！ ストレンジャー！」

グロウは辺りを見渡し、声の主を見つけ走っていった。
そこにはバスケットを片手に立っているストレンジャーの姿があった。

「おはよう、グロウ。」

「おはようストレンジャー。聞き覚えのある鼓動が聞こえると思ったら、ストレンジャーだったんだね。」

ストレンジャーは自分の下へと向かってくるグロウを見つつ、挨拶をした。

「まあな。ここが新しい城の建設予定地か？」

ストレンジャーは辺りを見渡しつつグロウに問いかけた。

「うんそうだよ。僕がちょっと大地の力を使って土地を作ったんだ。ストレンジャーはどうしたの？」

「ああ、皆建設途中とかで朝飯の用意が出来ないと思ってな。パンを用意したんだ。」

ストレンジャーは持っていたバスケットの中身をグロウに見せつつ言った。

「うわあ！ おいしそう！ スtrenジャーの手作り？」

「もちろんだ。皆で食べなよ。」

「ありがとう！！ スtrenジャー大好き！！」

グロウはストレンジャーにそう言うと、ストレンジャーを抱き上げた。

「さ、皆で朝飯食べようぜ。」

「うん！」

グロウはそう言うと、ストレンジャーを抱えたままその場を飛び立ち、チェリー達の元へと向かって行った。

「ストレンジャー。おはよう。」

「おはよう皆。」

グロウに抱えられたストレンジャーはプロミス達の元へつくと、挨拶をした。

「ストレンジャーが朝ごはん用意してくれたんだって。」

「今日も作業だろ？ 俺にはコレくらいしか出来ないと思うが、食べてくれ。」

ストレンジャーはグロウの腕の中から降り立ち、チェリーにバスケットを手渡した。

「ありがとうございます。 スtrenジャーさん。」

「うわあ！ おいしそう！！」

「いただきまーす！」

ホープは一足早くバスケットに入っていたパンを手に取り、食べた。

「美味い！！」

ホープは少々残っていた眠気をパンの美味しさで吹き飛ばし、笑顔で言った。

「よかった。 そう言ってもらえて。」

「だってストレンジャーの作った料理だもん。 当たり前だよー」

「そこまですら無いって。 グロウ。」

「でも本当に美味しいー」

「うん。 美味いぜこのパン。」

グロウとストレンジャーがそんなやり取りをしていると、いつの間にかチェリー達はパンを食べていた。

「今日も城の建設か？ チェリー。」

「ええ、今日も皆さんと協力して建設します。 一日でも早く作らないといけませんからね。」

「俺達も手伝ってもいいか？ 城にも自然の力が必要だろ？ 出来ることはあると思うんだが。」

「そう言っただけだととても助かります。 ありがとうストレンジャーさん。」

チェリーは食べ途中のパンを片手に、ストレンジャーに言った。

「じゃあ俺は一足先に戻って、皆に伝えてくるよ。 四神の力が必要だってわかったら、皆喜ん

で協力してくれると思うからな。」

「ありがとうございます。 ストレンジャーさん。」

ストレンジャーはチェリー達にそう告げると、翼を広げテトラクリスタルアイランドへと戻って行った。

チェリーは持っていたパンを食べ、食事を終えた。

「美味しかった。 では皆さん。 朝食が済んだら早速始めましょうか。」

「了解。」

まだ朝ご飯を食べているホープ達は、パンを片手にそう言った。

その後、皆の朝食が終了し、プロミス達は再び城の建設へと勤しんで行った。

基本的にプロミスが壁へと土を投げ、熱で壁を固めて行った。

グロウ達は木材を固定し、固められるまでしっかりと抑えていた。

チェリーはデザインした城を正確に建てるため、指示を出していた。

「お待たせ。 皆。」

チェリー達が作業をしていると、空を飛んでストレンジャー達がやってきた。

「皆さんご苦労様です。」

「俺達も協力するぜ。」

「ありがとうございます。 皆さん。」

アルドール達はひとまずチェリーに声をかけ、作業の助っ人としてやってきた。

そしてチェリーからの作業案を聞き、作業の輪へと入っていった。

「えっと、この辺りでいいのか？」

こちらはホネスティと共に、中庭の予定地へと向かってきたストレンジャー。

そこは城の外壁で囲まれた、城の中心だった。

「ええ。 綺麗なお花と芝生をたくさんよろしくね。」

「了解だ。」

ストレンジャーは大体の土地の広さを確認すると、掌を地面に当てた。

「召還！」

ストレンジャーがそう言うと、ストレンジャーの掌を中心に芝生が湧き出るように生え出し、綺麗な花々が次々と咲きだした。

「うわあ！！」

ホネスティはそんな不思議な現象を目の当たりにし、感動していた。

「こんな感じでいいのか？」

ストレンジャーは作業を終え、ホネスティに問いかけた。

「もちろんよ、ありがとう！ それにしてもすごーい。」

ホネスティはストレンジャーにお礼を言うと、新しく庭園として生まれた綺麗な土地を見つつ、花畑に吸い込まれて行った。

「さて、次の作業をするかな。」

ストレンジャーはそんなホネスティをしばらく見た後、チェリーの元へ戻って行った。

「綺麗～」

ホネスティは出来たばかりの花畑に座り込み、花畑を堪能していた。

「どんなデザインのだ？」

「確か。　．．．こんな感じ。」

一方、こちらはピスフリーとティザー。
ティザーは紙に絵を描き、ピスフリーに手渡した。
紙には城で使われていた家財道具が描かれていた。

「でも四神の力で、こんなことが出来るんですか？」
「ああ、俺の使える力は金。　金属の召還は俺の守備範囲だからな。」

ピスフリーは紙に書かれた道具達を一通り見つつ、ティザーに言った。
そして、持っていた紙を一時ティザーに返した。

「とりあえずクッキングヒーターからだな。　さて、初めて使う力だから、上手くいくかな。」

ピスフリーはそう呟きつつ少し前へ出ると、両手を合わせた。

「召還！！」

ドスン！！

ピスフリーはそう言いつつ両手を勢いよく離すと、掌からは銀色の金属の塊が出てきた。
約2立方mの塊だった。
召還された塊は地面に落ちた。

「コレを、どうなさるんですか？」

ティザーは召還された大きな金属の塊を見つつ、ピスフリーに問いかけた。

「こうするんだよ！！」

ピスフリーはそう言うと、召還した金属の塊を自分の拳で殴った。
すると、殴られた金属にはヒビが入り、金属は欠け、イラストと同じ様なものが出来上がった。

「こんな感じでどうだ？」
「すごい！」

ティザーは出来立ての家財道具を見て、賞賛した。

金属はヒビを中心として綺麗に削られ、見事なクッキングヒーターが出来た。

「火はアルドールに頼まねえと出ないけど、見栄えはコレでいいだろ？」

「ええ、コレで十分ですわ。 ありがとうございます。」

ティザーは出来栄えを確認し、ピスフリーにお礼を言った。

「さて、他の家財道具も作っちまわねえとな。」

ピスフリーはティザーからのお礼を聞き終わると、すぐさま次の行動へと取り掛かった。

「えっと、こんな感じでいいでしょうか。」

こちらは、ひとまずまだ出番の無いアルドール達の作業現場。

グロウ達と共に外壁の製作をしていた。

「ええ、じゃあそこを、プロミスさん。」

「了解だ。」

プロミスはチェリーからの指令を受け、土を片手に指定された場所へ。

「烈火！」

プロミスは指定された場所に土を当て、そのまま熱で溶かし固めた。

「よし。 これでいいか？」

「ええ、では次ですね。」

チェリーはプロミスの作業完成度を確認し、OKを出し次の場所へと向かって行った。

その後、お昼を挟み、ストレンジャー達はチェリー達と共に新しい城の建築を手伝って行った。

その日の作業効率は昨日のほぼ倍。

城はほぼ完成状態まで進んで行った。

「今日はお疲れ様。 皆さん。」

時刻は夕方。

チェリー達は作業を一通り終え、ストレンジャー達にお礼を言った。

「ああ、俺達も手伝えてよかったぜ。」

「また何か手伝えることが出来たら、おっしゃって下さいね。」

「明日。 来るからな。」

「はい。 ありがとうございます。」

チェリーは頭を下げ、再びお礼を言った。

「じゃあね。 スtrenジャー。」

「ああ、また明日な。 グロウ。」

「おやすみなさい。」

「おやすみなさい。 皆さん。」

ストレンジャー達はチェリー達にお休みを言うと、島へ向かって帰っていった。

「じゃあ皆さん。 私達もテントへ戻りましょうか。」

「ハイ。 アリス様。」

チェリーからの申し出にホープは答え、島にいる人物達は建設途中の城へと戻って行った。

同じく城に用意したテントへ戻ろうとしたプロミス。

『！』

ふと、何かの気配を察し、気配のした方を見た。

その方向は、海だった。

『なんだ。 この胸騒ぎ・・・』

プロミスは妙な胸騒ぎに襲われ、その場に立っていた。

「おーい。 プロミス、戻るぞー」

「あ、ああ。」

プレスルに声を掛けられ、現実に戻されたプロミスは、城へと向かって行った。

再び見つけた敵

NEWビーイングキャッスル予定地

ストレンジャー達がテトラクリスタルアイランドへ戻ったその後。
ホープ達は昨日同様に城の中に立てたテントへ入り、夜を過ごしていた。

「ふああ～ 今日も疲れた。」

ホープは少し大きなあくびをしつつ、そう言った。

「でもストレンジャー達が手伝ってくれたおかげで、とっても作業が進んだね。」

テントの外にいるグロウは、今日出来た城を見つつそう言った。
ストレンジャー達が手伝ったこともあり、城の中庭はにぎやかになり、外装がより一層しっかりとしていた。

「早ければ明日に終わりそうだな。今日は早めに寝ようか。」

「そうだな。」

ホープはそう提案すると、プレスルは同意し、テントの明かりが消された。
同様にチェリー達のテントの明かりも消され、島に明かりが無くなった。

ホープ達が寝て数時間後。

ゴソゴソ・・・

ふと、明かりの無いテントの中から物音がし、1人の人影がテントから出てきた。
月明かりに照らされ、写ったのは赤いボディ。プロミスだった。

プロミスは自分が出てきたテントの中を確認した。

そこには寝袋の中に入り、軽い寝息を立て、まだ夢の中のホープとプレスルの姿が。外にいるグロウも同様に寝ており、寝息を立てていた。プロミスは誰も起きていない事を確認し、城の外へと移動した。

誰も起きていない、まだ夜の中であるビーイングキャッスル予定地の島。プロミスはしばらく、そんな静寂に包まれた島を1人歩いていた。

『確か、この辺りだったな。』

プロミスはとあるポイントへ到着すると、立ち止まった。そこは、プロミスが寝る前に何かの気配を感じた場所だった。プロミスは辺りを見渡し、気配の感じた方角を見た。そこは海だった。

「この先、か。」

プロミスはそう呟くと、背中から炎を噴出し、翼のような形に炎を変えた。そして、炎の翼を羽ばたかせ、空へと飛び立ち、気配の感じた方角へと飛んで行った。

プロミスが飛び立って、数時間後。島には再び朝日が昇り、夜に包まれていた世界を明るく照らした。

「うーん。」

その朝日に誘われ、ビーイングキャッスルの中庭のテントで寝ていたホープ達は目覚め、テントから続々と出てきた。

「おはよう。 ホープ。」

ホープが外へ出ると、城の中庭で寝ていたグロウが起きており、ホープに挨拶をした。

「おはよう、グロウ。 プロミスを知らないか？」

「プロミス？ ううん、知らないよ。 いないの？」

「ああ、起きたらプロミスが寝ていた寝袋が空になってたんだ。夜のうちに何処かへ出かけたのか。」

「何処へ出かけたんだろう。近くからはプロミスの鼓動は聞こえないけど。」

グロウは少々心配しつつ、そう言った。

「まあ多分完成の時には帰ってくるだろう。俺達はとりあえずこちらの作業をしちまわねえとな。」

「う、うん。分かった。」

「皆さーん。ご朝食の用意が出来ましたよー」

ホープとグロウはそんなやり取りをしていると、城の食堂の方からティザーの声がした。

「とりあえず、朝食食べようぜ。」

「うん。」

ホープはそう言うと、一足先に食堂へと向かって行った。

グロウはそんなホープを見つつ、ゆっくりと歩いて食堂へと向かって行った。

その後ホープ達が食事を終わると、昨日同様にストレンジャー達が手伝いにやってきた。

「おはよう、グロウ。」

「おはようストレンジャー。」

ストレンジャーは一足先に島に降り立つと、近くにいたグロウに挨拶をした。

「ストレンジャー プロミスがそっちに行っていない？」

「プロミスか？ いや、来てないけど。どうしたんだ？」

「じつは、今朝から姿が見えないんだ。ちょっと心配で。」

グロウは少々顔を暗くしつつストレンジャーに言った。

「鼓動は聞こえないのか？」

「うん。多分大地に戻れば聞こえると思うんだけど、今は近くしか感知できないんだ。それで、聞こえない。」

「だとすると、遠くに出かけたのか。 作業が一通り片付いた後、俺探してくるよ。」

「うん。 お願いねストレンジャー。」

ストレンジャーからの提案を聞き、グロウはお願いした。

「じゃあとりあえず、今日も頑張ろうぜ。」

「うん。」

2人はそう言うと、城の建設場所へと向かって飛んで行った。

元ビーイングキャッスル周辺 海上

一方、グロウ達のいるビーイングキャッスルとは別の場所にいるプロミスは、翼を羽ばたかせ空を飛んでいた。

向かっている先は、気配を感じた方向。

それは、チェリー達が元々住んでいた、ビーイングキャッスルがあった島だった。

「あれは・・・」

プロミスは島を見つけ、その島にいる人物達を見つつ呟いた。

そこには黒いフードを見に纏った、体系がバラバラの人達だった。

プロミスは飛んでいた場所から高度を下げ、海面ギリギリを飛んで島に近づいた。

島に到着すると、プロミスは少しずつ島の上へと向かい、炎で島の壁にくっ付き島の上を見た。

そこには黒いローブを見に纏った大勢の人達がいた。

「チッ、ここにはもう奴らの手がかりはねえか。」

「力のあった気配は、もうここにはありません。 別の場所からします。」

「そろそろこの世界も消しまわねえとな。 俺達には時間がねえからな。」

島の上にいるローブを見に纏った奴らはそう言いつつ、次の計画を考えている様子だった。

『あいつらには確か見覚えがあるな・・・』

プロミスは少し島に顔を出しつつ、そこにいる人達を見ていた。

『そうだ。 たしか俺がいた場所にもやって来て、世界を壊そうとした奴らだ。 確か『世界破壊グループ』とか言ってたな。』

「どうですか？ ボス。」

プロミスが考えている時、別の場所にいた小さめの存在が声を掛けた。
ボスと呼ばれた存在は、声を掛けた存在を見つつ言った。

「この世界を壊しちまわねえと、俺達の面目が丸潰れだ。 閣下がいなくなった今、この世界を壊すことだけを目的になんとかしちまわねえと。 もたもたしているとあの時同様に厄介な存在達に感づかれておわりだ。 忌々しい獣達にな。」

ボスは腹ただしそうな顔をしつつ、そこにいる存在達に言った。

『この世界も消すつもりか。 あの様子だと、ストレンジャー達に妨害されたのか・・・ そういえば、テトラクリスタルアイランドも襲われたって言ってたな。』

プロミスは以前ストレンジャーが言っていた事を思い出した。

『この様子だとかいつら、もう一回なにかしでかすつもりか。 こっちは1人だが、食い止めるか。 敵だしな。』

プロミスはそう決意し、再び背中に炎の翼を生やし、空へと飛び立った。

「！！ 何者だ！！」

島にいた敵達はふと別の気配を察知し、気配のした方向を見た。
そこには炎の翼で空を飛んでいる、プロミスの姿が。

「世界破壊グループとか言ったな、お前ら。 この世界も壊す気か？」

プロミスは上空から敵を見つつ、問いかけた。

「チッ、あの時とは別の獣か。 忌々しいと言ったらありやしねえな。」

敵の1人はプロミスを見つつ、そう言った。

「俺にとって、この世界は最後の世界だ。 もうお前らには消させねえぜ。」

「以前にも会った事があるな。 お前。」

「そうかもしれねえな。」

敵はプロミスを見つつ、そう言った。

「もうこうなったら、貴方を撒き沿いにしてこの世界を消してあげるわ。」

「これ以上、この世界の破壊に時間をとってる場合じゃあねえんだ。」

「またお前らは、勝手なことを言ってるな・・・」

プロミスは敵を見つつ、そう言った。

だが今のプロミスは今までのプロミスとは違い、目に光が無かった。

以前住んでいた様々な世界を襲った彼らへと憎しみと、依然として行われている世界破壊の怒りが、プロミスの我を消し去った。

「世界に必要無い存在は、消すだけだ。 プロミネンス！」

プロミスはそう言うと、手に大きな火炎球を召還し、敵のいる島に向かって放った。

島にいた敵はその炎を避け、プロミスを見た。

「敵に変わりは無いみたいだな。 ならこちらもやらせてもらう！！」

敵はそう言うと、戦闘体制になった。

そして、1対多人数の、新たな世界を掛けての戦いが始まった。

悲しみと怒りの暴走

元ビーイングキャッスル

プロミスは新たな城を建設している島を飛び出し、見つけたものは『世界破壊グループ』だった。
この世界の危機を知り、以前と今の怒りによって我を失ったプロミスは、炎を片手に、敵と戦っていた。

「消えうせろ！！」

プロミスは体の中で大量に燃え盛り、体を熱くする憎しみと怒りの炎と熱に支配され、敵と戦っていた。

その炎は存在達を救う火ではなく、全てを燃やし尽くす炎だった。

プロミスは上空から炎を放った後、炎を放ったポイントへ向かって行った。

島の上にいた敵は炎を避け、見に付けていた武器をそれぞれ手にし、島に着地したプロミスを見た。

「これ以上邪魔をされると、お前の命は無くなるのは覚悟の上か。」

「全ての世界を壊す行動、それは認められない行動。俺はその行動を消し去るだけだ！！」

プロミスは体に凝縮した様々な炎で作った膨大な熱を吹き放ち、敵を熱風で攻撃した。

敵はすさまじい熱風にあおられ、島の端にいた敵は海へと落ちた。

「生意気な！！ 死ね！！」

島に残った敵は武器を片手に、全方向からプロミスへと襲い掛かった。

だがプロミスはその攻撃を全て避け、手に炎で作った槍を召還し、近くにいた敵を全て切り裂いた。

切り裂かれた敵はプロミスの近くで崩れ、爆発した。

「クッ・・・」

崩れた敵からの爆発で発生した熱、衝撃波、破片がプロミスを襲った。

プロミスは全方向からの攻撃を受け、体に大量の傷を受け、その場に方膝を付けた。

切られた衝撃で出来た傷口からは、血が流れた。

「甘いな。俺達はやられても攻撃は止めねえのさ。先に命の灯し火を消すのはお前だ。」

敵は少しプロミスから距離を置き、そう言い放った。

だがプロミスはそんな大量の攻撃を受けたにも関わらず、再びその場に立ち上がった。

「やられないぜ・・・ コレくらいではなあ！！」

プロミスは再びそう言うと、槍を持たない片手から炎の矢を敵に向かって放った。

近くにいた敵はその攻撃を受け、その場で爆発した。

そして、再びプロミスを襲った。

「我を失った存在ほど、面倒なものはねえな。」

いまだにたくさんの敵はその場に立っており、再びプロミスに向かって攻撃した。

プロミスはその攻撃を再び避け、攻撃し、衝撃波と爆発による攻撃を受けた。

攻撃し、攻撃される。

その繰り返しかえし起こるループによって、段々とプロミスの綺麗な白いボディには切り傷が増えていき、流れる血の量も増えていく。

「・・・」

いまだに目の光が戻らないプロミスは、体から流れる血と切り傷からの痛みを受けつつ、その場に立っていた。

だが、体は限界に近い状態で、プロミスは少しフラフラと、その場に立っていた。

「・・・限界に近いようだな。」

敵はほぼ全て消されてしまい、その場に1対1となった敵はプロミスを見つつ、そう言った。

「止めを刺させてもらうぜ、獣。」

敵はそう言うと、帯剣を引き抜き、プロミスに向かって突撃した。

プロミスはその攻撃を真っ向から受ける体制になり、槍を片手に敵に突撃した。

「ハッ！！」

敵はプロミスを横から切る様に剣を振った。

プロミスは持っていた槍で剣からの攻撃をなぎ払った。

カキンッ

だが剣の方が強く、なぎ払った反動で槍は折れてしまった。

「折れるか・・・」

プロミスは続けて放たれる攻撃を全て避け、後ろへ下がった。

だがその場に立ち続ける体力は残されては折らず、プロミスはその場に崩れてしまった。

「痛い・・・」

プロミスは全身の傷を見つつ、ゆっくりと立ち上がった。

だが立っても立ち続ける事は出来ないため、再び崩れてしまう。

「止めだ！！」

敵はそんなプロミスを見つつ、止めを刺しに行った。

「ハッ！！」

そして、剣をプロミスの頭上から振り下ろした。

ガシッ！

「何っ！」

だが剣は途中で止まり、攻撃が遮断された。

「・・・甘い」

剣はなんと、プロミスが片手で受け止めていた。
だが剣の切れ味がいいため、手袋から血が滲んでいた。

「クソッ！」

敵は剣を抜こうとするものの、プロミスがガッチリと掴んでいるため、抜けなかった。
プロミスは開いている片手から炎を出し、敵に放った。

「なにっ！」

炎は敵の体に纏わりつく、全身の身動きを封じた。

「クソッ！！」

敵は拘束から逃れようとするものの、炎は敵を逃がさなかった。
そしてプロミスは、開いている手を敵の左胸に当て、がっしりと掴んだ。

「グハッ！！！」

敵は外部からの攻撃を受け、拘束の中で悶えた。

「消・え・ろ！！」

プロミスはそう言うと、掴んだ部分から熱と炎を噴射した。
炎と熱は敵の体内に侵入し、敵を内部から燃やし尽くした。

「グワ—————ッ！！！！」

敵は内部と外部からの熱と炎に耐え切れず、蒸発してしまった。
爆発も全て炎の中で済まされてしまい、プロミスの元へは襲い掛かってこなかった。

プロミスは敵が消えるのと同時に、その場に立ち上がり、両手を天高く向けた。
我を失っているため、暴走しているようだった。

その行動が生むものは、破壊そのものだった。

「消えてしまえ！！！」

プロミスは両手に大量の炎を召還し、発射させようとした。

ガシッ！

だが、その行動を封じようとプロミスの背中から手が伸び、自分の体を抱く人物が現れた。その手は灰色で、プロミスとは違い、手袋はしていなかった。

「お願い！！ 目を覚まして、プロミスさん！！」

プロミスを背中から抱いたのは、なんとラブソディだった。ラブソディはプロミスの背中から両手を出し、プロミスを背中から抱く様に立っていた。

「離せ！！！」

プロミスは自分を抱く人物を振り払おうと熱風を出したが、ラブソディはそれを全て受けたまま、行動を変えなかった。

「お願い！！ 目を覚まして！！」

ラブソディはそう言うと、プロミスを力強く抱き、自分の体にプロミスを引き寄せた。プロミスはその行動に引かれ体制を崩し、ラブソディの体に向かって倒れた。2人はそのまま島に向かって倒れた。

プロミスは行動が変えられ、両手の炎は消された。そして、倒れた反動でラブソディの胸の中に顔が埋められた。胸の中からは、心臓の鼓動が聞こえた。

「・・・ラ、ラブソディ？」

すると、プロミスはその衝撃と鼓動によって、目を覚ました。

「よかった。目を覚まして。」

「お、俺はいったい・・・ん？」

プロミスは辺りを見渡しつつ、今の状況を見た。

「！？ す、すまない！！」

プロミスは自分の顔がラプソディの体にくっ付いている事を確認し、離れた。
それと同時に、体に大量の痛みが走った。

「クッ！！！」

プロミスは両手で痛む箇所を押さえつつ、苦しそうに言った。

「あ、動かないで。 リストレイション！」

ラプソディは全身の痛みに耐えるプロミスを見つつ、癒しの光をプロミスに当てた。
すると、プロミスの全身に作られた切り傷は消え、体の痛みが全て消えた。

「大丈夫ですか？」

そんなプロミスを見つつ、ラプソディは問いかけた。

「ああ、ありがとう。 ラプソディ。」

プロミスは先ほどまで痛んでいた全身を見つつ、ラプソディにお礼を言った。

「ラプソディ、俺はいったい・・・」

「貴方は過去の出来事と、今の出来事の怒りと憎しみの炎に支配されて、我を失っていたんですよ。」

プロミスからの問いかけに、ラプソディは答えた。

「怒りと、憎しみ。」

「過去の世界を襲った彼らへの憎しみ、そして今の世界を壊そうとする彼らの行動に怒りを持ち、そうってしまったんです。そして貴方はそのまま暴走してしまい、この世界を壊そうとしていたんです。」

ラブソディは少々遠慮がちにプロミスにそう言った。

「俺が・・・この世界を壊そうとしてたのか!？」

プロミスはラブソディからの答えに驚きつつ、ラブソディに言った。

ラブソディはそんなプロミスを見つつ、頷いた。

「俺は・・・自らこの世界を壊そうとしてたのか・・・罪を償うはずの、この俺が・・・」

プロミスはそう言いつつ頭を垂れ、涙を流した。

そんなプロミスを見つつ、ラブソディはプロミスの肩に手を置いた。

「大丈夫です。貴方はこの世界を守ろうとしていたことには変わりはありません。暴走は、貴方の体に残った怒りと憎しみによるものです。貴方は悪くありません。」

「でも!俺はこの世界を壊そうとしていた!!それに変わりはない!!」

プロミスは涙を流しつつ、ラブソディに言った。

「そうですね。確かに貴方はこの世界を壊そうとしました、罪を償おうとしました。でも全部の行動がプラスに出来る人なんて、この世界にいますか？」

ラブソディはそんなプロミスを見つつ、そう言った。

「誰だって行動がプラスになるようにします。でも、その行動全てがプラスになるとは限りません。絶対に、何処かでマイナスの行動があるんですよ。」

「!!!」

ラブソディがそう言うと、プロミスははっと気が付き、ラブソディを再び見た。

「だから、大丈夫。貴方は悪くはありません。世界を守った、それだけで十分ですよ。」

ラブソディはプロミスを見つつ、笑顔でそう言った。

「・・・そうなのか？」

プロミスは呟くようにラブソディに問いかけた。

ラブソディはその問いかけに、頷いた。

プロミスは涙を拭い、その場に立ち上がった。

「分かった。」

「とりあえず、自分のカフェに帰りましょう。」

ラブソディはそう言うと、手に傘を召還しプロミスの手を取った。

2人はそのままその島を後にし、ミドルガーデンのカフェに向かって飛んで行った。

テトラクリスタルアイランド周辺 ミドルガーデン

世界破壊グループとの一戦を終え、プロミスはラブソディに誘われるまま、ラブソディの経営するミドルガーデンのカフェに来た。

店の看板は休業になっていたが、ラブソディはそんな扉を開け、プロミスを店内に誘った。

そして、店内のカウンター席に着いた。

ラブソディはそんなプロミスのために、飲み物の準備をした。

「なあマスター 俺は、このままでいいのか？」

自分の座るカウンター席の前で作業するラブソディを見つつ、プロミスは問いかけた。

「俺は以前までの俺のした罪を償うために、今の姿になった。でも今日みたいな事が起こってしまった。もうなんだか、よくわからなくなっちゃった。」

プロミスはそう言いつつ、カウンターに突っ伏した。

「悩み事は尽きない、自分はそう考えていますよ。」

ラブソディは作業をしつつ、プロミスに言った。

「プロミスさんは確かに、世界を救うためにその行動に移りました。でもその行動に移る前、マイナスの感情を受けた後行動した。その上マイナスの感情は大きかったため、制御できず暴走してしまいました。それは仕方なかったことなんですよ。」

「・・・」

プロミスは体制を変えず、ラブソディの言っている事を聴いていた。

「誰だって、大きすぎるマイナスの感情は制御できません。いつしか許容範囲を超えてしまい、暴走してしまいます。貴方だけではありませんよ。貴方の行動は間違っていない。」

ラブソディはそう言いつつ、出来立てのコーヒーをプロミスの前に置いた。

「貴方のしている行動はプラス。間違っていない事を自分が証明しますよ。」

「・・・でも、本当に間違っていないといえるのか？」

プロミスは顔を起こし、ラプソディを見つつ問いかけた。

「いえませよ。」

ラプソディは笑顔でプロミスからの問いかけに答えた。

「貴方は約束された行動をする存在、それ以上でもそれ以下でもありませんよ。それに、この世界に来て、貴方を認めてくれない存在はいましたか？」

「・・・いや。」

「でしたら、貴方はプラスの行動をしていることは間違っていない。貴方を必要としている方もいますよ。」

「それは、いるのかな。」

プロミスはカウンターに置かれたコーヒーを手に取り、飲んだ。

「時期に、分かることだと思います。」

ラプソディはコーヒーを飲むプロミスを見つつ、そう言った。

リリリン♪

すると、不意にカフェの扉が開き、誰かが入ってきた。

「こんな所にいたのか。プロミス。」

カフェに入ってきたのは、ストレンジャーだった。

「どうしたんだ、ストレンジャー。」

「お前、さっきまでしていた行動を忘れたのか？ もうすぐ新しいビーイングキャッスル城が出来上がるんだぜ。」

ストレンジャーはプロミスからの反応を見て少々呆れつつ、用件を言った。

「それで、チェリーから言付かって来たんだ。『最後の仕上げをマスターとプロミスにして欲しいから、呼んで来てくれ。』ってな。」

「仕上げをですか？」

チェリーからの伝言を聞き、ラブソディはストレンジャーに問いかけた。

「ああ、あの城は自分がお世話になった、これからもよろしくする人達皆に作ってもらいたいんだと。で、以前のことで世話になったマスターと、今回のことで一番世話になったプロミスにして欲しいんだと、チェリーは言ってたぜ。」

ストレンジャーは伝言の後にチェリーが言っていた事を、2人に伝えた。

「俺が、チェリーに世話を？」

プロミスは少し驚きつつ、ストレンジャーに言った。

ストレンジャーは頷いた。

「そう言うわけだ。皆待ってるから、早く行こうぜ。」

「プロミスさん。行きましょう。」

いつの間にかラブソディはカウンター内からストレンジャーのいる場所へ移動しており、プロミスを誘った。

プロミスは先ほどまで自分が飲んでたコーヒーを全て飲み、席から立ち上がった。

「ああ、分かった。」

プロミスはそう言うと、2人と共に外へ出て行き、城のある島へと向かって飛んで行った。

NEWビーイングキャッスル

ストレンジャーに誘われ、ラブソディとプロミスは新しく作ったビーイングキャッスルのある島に向かって飛んでいた。

ラプソディは傘を差し、ストレンジャーは翼を羽ばたかせて飛んでいた。
プロミスはそんな2人に手を取られ、2人に運んでもらっていた。

「あ！ 帰ってきましたよ！」

プロミス達が島に上陸しようとする、3人を見つけたビリーブは指差しつつ皆に言った。
島にはアルドール達はもちろん、ビリーブにコレッジ、城に住むチェリー達、それにブラベリー
がいた。

「お待たせ！ 皆さん！」

ラプソディはプロミスと島を下ろしつつ、チェリー達に言った。

「いえ。こちらこそ、お忙しい中呼んでしまってすみませんでした。」

チェリーはラプソディとプロミスを見つつ、そう言った。

「じゃあ、最後の仕上げをしましょうか。」

「そうですね。」

アルドールとラプソディはそう言うと、島にいる存在達は城の最終作業現場へと向かって行った。
プロミスは少し遅れて、その場所へと向かって行った。

「では、ラプソディさん、プロミスさん。あの場所が最後の仕上げです。」

チェリーは城のとある場所へと向かい、指差しつつ2人に言った。
そこは、城の入り口の門がある外壁の上の部分だった。
その部分だけ木材が見えており、まだ固めていない様子だった。

「あの場所に、マスターと、プロミスさんお得意の炎で固めてもらいたいです。」

「でも、俺でいいのか？ チェリー。」

プロミスはまだ少し大事な事を自分がやっていいのか納得していなかった様子で、チェリーに問

いかけた。

「もちろんですよ。 貴方の約束された炎で作ってくだされば、この城もより一層、大切な物として出来あがります。 プロミスさんは、新しい住居者でもあるんですからね。」

チェリーはウィンクをしつつ、プロミスに言った。

「分かりました。」

プロミスはそんなチェリーを見つつようやく納得し、そう言った。

「じゃあプロミスさん、行きましょか。」

「ああ。」

ラプソディはそう言うと、プロミスを誘い、空へと飛んで行った。
プロミスは背中に炎の翼を生やし、空へと飛んでいった。

「行きます！」

「行くぜ！！」

2人はそう言うと、最後の仕上げの部分に土をかけた。

「フレイム！！」

「プロミネンス！！」

そして土がかかったのと同時に、2人は手から炎を放った。
2人の手から放たれた炎は一緒になり、土を燃やし固めた。

キラッ！！

すると、城の外壁が完成し、城は綺麗な純白の外装へと変化した。

「うわぁ！ 城が！」

「純白に、染められていく。」

最後の仕上げをした2人は、変わり行く外壁を見つつそう言った。

そして、高度を下げ、皆のいる場所へと戻って行った。

「お疲れ様！ ラプソディさん！ プロミスさん！」

2人が下へと戻っていくと、チェリーは賞賛の声を2人に言った。

「チェリーさん。 コレはいったい・・・」

「この城は完成すると、皆さんの努力と心に移した外壁へと変わるんです。 皆さんの心からの作業によって、こんなに綺麗な城になったんですよ。」

「じゃあ、この白が。」

「皆の、努力の結晶・・・」

ビーイングキャッスルの前にいるプロミス達は、変化して生まれ変わったビーイングキャッスルを見て言った。

城の外壁の色は土色から純白に代わり、素敵な城へと生まれ変わった。

「改めて言わせてもらいます。 皆さん、この城を作ってくれて、ありがとう！！」

チェリーは笑顔で、今回の作業を手伝ったストレンジャー達を見つつ言った。

「こちらこそ、こんなに素敵な城作りを手伝わせてもらえて、ありがとうな。」

「みなさーん！！ 晚餐の支度が出来上がりましたよー！！」

城の外で盛り上がっていると、プレスルとティザーが門を開け、外にいる主人達に向かって声を掛けた。

「では皆さん！ 今晩はディナーを堪能してください！ 手伝ってもらったお礼です。」

「うわあ！！ でもいいのかしら？ こんなに尽くしてもらって。」

「もちろんです！」

チェリーはそう言うと、プロミスの手を取った。

「行きましょう。 プロミスさん。」

チェリーは笑顔でプロミスに言った。

「あ、ああ。」

プロミスはチェリーの手を握り返し、仲良く城の中へと向かって行った。

そんな様子を、ストレンジャー達は見つ、同じく城の中へと向かって行った。

そして、ビーイングキャッスルの中庭では、城が生まれ変わった事、出来た事を祝杯するパーティが行われたのであった。

プロミスはそんなパーティを、笑顔でチェリーと共に楽しんでいた。

そして、中庭でダンスを踊った。

「これからよろしくね。 プロミスさん。」

「こちらこそ、よろしくおねがいます。 アリス様。」

2人は踊りつつ、そう言ったのであった。

プロミスは、本当に認められた、約束された存在となって、笑顔でこの城のパーティを楽しんだのであった。

チェリーも同様に、新しいお友達が出来たせいなのか、とても嬉しそうに踊っていた。

—E P I S O D E E N D—